

## 本は内容力・実績力・ 販促力の掛け算

「装いの影響力」を書き、いろいろな変化があったのですが、本を書く意味はどこにあると思われませんか？

高橋 著者にとって本を書く意味はすごく大きくて、一冊書きあげることです。それまでは明らかに違うステージに入っていきます。何故なら書くことを通し、人生でそれだけ考えたことがないくらい考えざるをえなくなり、そうすると自然に自分の考えも本業も深まっていく。この経験は他ではなかなか得ることができません。そしてそれだけ精魂込めて作りあげたものを、読んだ方から返ってくるものを受けて感じることは、お金には換算することができないまさに宝物です。

杉浦 本には著者のものすごいエネルギーが注ぎこまれています。そして私たち編集者も一心同体になったように同じエネルギーを使つてはじめていい本が出来上がります。著者は本来こういうふうには書くはずというのを補ったり、時には著者本人が乗り移つたみたいな感覚にもなります。徹底的に著者に寄り添うなかで、その著者にしか伝えることのできないメッセージを言語化し、世の中に新たなものを伝えることで世の中が進化します。そこが本を書く意味なのではと感じます。

高橋 そう、まさに本は内容が一番。なかには販促力だけで売れる本もありますが、それだと意味がありません。悩みを解決

し、人生に好影響を及ぼすのが本の役割。最近コミュニティファーストやファンファーストになりすぎていて、読んだ人の役に立つという視点が薄れていると感じるのですが、そうじゃないだろ！という思いがすごくあります。だから独立するときには会社名をブックのクオリティーでブックオリティーにし、クオリティーファーストにしようという思いを込めました。

杉浦 本とは、内容力・実績力・販促力の掛け算で決まるんですが、編集者として本作りにはささざるなかでわかりました。実績力とは著者が仕事でどういった成果をあげてきたのか？といういわゆる武勲、実績力がつよい著者には信者も多いですが、信者には売れても全体をみると新しさがまったくない場合もあります。とはいえ新しいことはわりと書いていても売れません。新しさをどれくらいの比率で入れるのか？を想定読者にあわせて内容を調整していくのが非常に重要ですね。

### ただの解説本では 人の心は動かない

「私のまわりでも本を書きたい人がたくさんいるのですが、本を書くために必要なことは何ですか？

高橋 エピソードとロジック、本を書くにはこの両輪が必要です。わかりやすくいうと受験合格体験記、合格までの道のりを書くときに、エピソードだけだとただの体験談でしかない。いい話きたい！とおわると、残念ながら本としては成立しないの

## 杉浦博道

Hiramichi Sugiura

株式会社かんき出版  
編集部

東京理科大学卒。編集者9年間で10万部突破が10点(30万部超が2点、15万部以上が5点)代表作に『ガボール・アイ』『瞬読』『老人の取扱説明書』『松岡修造の人生を強く生きる83の言葉』『日本人のちょっとヘンな英語』『世界一簡単な髪が増える方法』『ローマの休日』を観るだけで英語の基本が身につくDVDブック』『ポケット版のび太』という生きかた。



です。合格までのメソッドやロジックが入ってくると、他の人でも再現することができ

る。だから本を書くためには、バックストーリーとその経験から得た独自のノウハウの両輪が必要なのです。

杉浦 本を読んで自分もそんなふうになりたい！とか、いまの自分の抱えている問題を解決したい！という思いがあるから本を買うわけですね。著者の言っているやり方をやってみて上手くいきそうだとイメージできるから本を買う意味があるわけなので、そこが本のなかでの確に表現できないと、ただの感動話やおもしろ話で終わってしまうのです。だからビジネス書や実用書はロジックやノウハウに落とし込んでいく必要がありますね。

高橋 とはいえ、ノウハウだけが書いてあってもつまらない。ステップ1、ステップ2という感じでレジュメみたいな解説本ではダメ

です。なぜダメかというところの解説本では人の心は動かないからです。たとえば取扱説明書とかがそう。正しいことが順番通りに書かれているので、書いてあるとおりにすれば間違えることなく機械などを使うことができますが、そこに感動はありません。本というものには、なにか人の

心突き動かすパワーが必要です。そこそがノウハウを肉付けするその著者ならではのエピソードなのです。

杉浦 エピソードを読むことによつて、読者が著者の気持ちになり、読んでいるうちその情景が浮かんでくる。読んでいる人がこれは自分事なんだと如何に思ってもらえるかが大切です。エピソードを読んでいるなかで肝心のノウハウも自然と伝わっていく、そんなのができたら最高ですね。だから著者が自力でそこまで完成させることの出来るレベルであれば、おそらくどの出版社や編集者でも一定水準以上の本

## 新たなものを伝えることで 世の中が進化する

が出せます。ただし著者は文章を書く力口ではないので、我々のような編集者の力量も無視できないでしょう。

高橋 近藤麻理恵さんの「人生がときめく片づけの魔法」は私が編集したのですが、この本はまさにそうでした。彼女のなかではノウハウは最初から完璧にあつて、すごく新しい片付け方法を編みだしていました。でもそれを伝えるためのエピソードがまだまだ弱かった。だから彼女に、読んでいる人が想像できるようにとにかく情景をこと細かく書いてくれと。なのであの本は描写がものすごく細かいのです。ノウハウ自体も新しく面白いものなのですが、それだけではなく読み物として面白いものになっているのはそういうことが要因です。

本の中に出てきた時に  
線を引きたくなる言葉